

反復感染症における特異的防禦能について

木谷 孔保 ・ 古内 一郎
栗山 一夫 ・ 馬場 広太郎*

易感染傾向を示す13才女兒について、特異的感染防禦能に関する諸検査を実施した。

症例 13才 女子

初診：1979年6月22日

主訴：耳漏、鼻漏（粘膿性）、鼻閉

現病歴：幼小時から急性中耳炎を繰り返している。

6才頃から副鼻腔炎、鼻茸を指摘されていた。

既往歴：気管支炎、肺炎で2回入院。

家族歴：特記すべきこと無し、

検査成績については、血清総蛋白量5.3g/dlから5.8g/dlの範囲の変化、A/G比の低下、白血球数の増加10,000から15,800の範囲での変化、グロブリンの減少、特に γ -グロブリンの低下がみられ、その中でIgDの軽度上昇がみられた。1979年6月22日より1979年10月5日までの間 γ -グロブリン3ml週1回筋注を行つたところ、IgD値の減少をみたが、その他の変動は特にみられなかつた。更に、T細胞百分率、B細胞百分率の検査でも正常範囲を示した。つまり、B細胞数は充分であるがサブレッサーT細胞機

能異常が考えられるので、リンパ球幼若化試験を実施したところ、サブレッサーT細胞機能の異常（低下）が認められた。その後、1980年7月31日現在までの諸検査成績は、ほとんど初診時の検査成績と同様で、あまり変化はみられなかつた。

以上の検査成績から、 γ -グロブリンの低下は、B細胞の数が充分である所から、先天性のものとは考えられず、症候性低 γ -グロブリン血症と思われた。鼻茸、副鼻腔感染症の遷延化が、サブレッサーT細胞の機能障害に関与している可能性も考えられるため、副鼻腔の手術的療法を予定している。

感染防禦能の低下には、主として好中球の機能障害に起因する非特異的なものと、主として免疫グロブリンの関与する特異的なものに分類される。本症例の場合、異常に低値を示す γ -グロブリン、およびその分画の検査成績から後者が考えられ、しかも感染の遷延による症候性のもと考えられる症例を経験したので報告した。

* 独協医科大学耳鼻咽喉科学教室